

願海編著・冷泉為恭画『仏頂尊勝陀羅尼明驗録』

日並彩乃

はじめに

本稿は、願海編著・冷泉為恭画『仏頂尊勝陀羅尼明驗録』を取り上げる。本書は、孝明天皇や祐宮（明治天皇）の安穩長久を祈り、「勤王僧」と呼ばれた天台僧大行満願海（一八二三―一八七三）が陀羅尼の功德を和漢古今の事実¹に徴して証明し、布教を意図した版本である。そして、挿絵を担当した冷泉為恭（一八二三―一八六四）は、江戸時代後期の復古大和絵の絵師である。為恭の画業は、京都御所や大樹寺などの大規模な障壁画から小さな掛幅に至るまでの数々のやまと絵作品と、願海のための多くの仏画という二つの領域を跨った絵画制作が生涯並行していた。二人の心情には温度差があったように思われるが、¹ともかく願海にとって為恭は、古画に対する深い知識を用いて、自身の復古と尊王の思想を絵画化することが出来る絵師であったと考えて間違いないだろう。

筆者は、為恭の仏画を三期に分類した²。高山寺などに入入りし古画の模写を盛んに行った生年から嘉永七年（一八五四）頃までが第一期、願海ために仏画を制作した嘉永六年（一八五三）頃から文久三年（一八六三）頃までが第二期、浪士の襲撃を受けて願海が住職を務める紀州粉河寺御池坊へ向かい出家した文久三年（一八六三）頃から没年までが第三期である。為恭と願海が、どのような経緯で知り合ったかは定かでないが、嘉永六年（一八五三）に出版された『勘發菩提心文』の挿絵を為恭が担当したことにはじまるようだ。『仏頂尊勝陀羅尼明驗録』は、嘉永七年（一八五四）十月に発行されているから、願海に出会って間もない第二期のはじめにあたる。

為恭の仏画に関する研究は少なく、本書に関しても、書名が登場するばかりで、中身を紹介されたことは一度も無い。したがって本稿は、為恭の仏画研究の一助となるべく、挿絵に注目しながら本書を紹介したい。

一 『仏頂尊勝陀羅尼明驗録』の概要

陀羅尼とは、何らかの効果を願って口にする呪文のことである。短いものを真言、長いものを陀羅尼と使い分けるが、線引きは曖昧なようだ^③。仏頂尊勝陀羅尼は、尊勝仏頂に捧げられた陀羅尼を意味し、唱えることによって滅罪、生善、息災延命などの現世利益が得られる。

本書は嘉永七年（一八五四）に刷られてから七五年を経て、昭和四年（一九二九）に再刷されており、関西大学図書館にはこの二種類が所蔵されている。

本稿では、同図書館での呼称に従って、原刊本の前者を比叡山常楽院蔵版「挿図1」、改訂増補の後者を高山寺蔵版「挿図2」と記載する。

まずは、所蔵から遡って、両版の来歴を検討する。比叡山常楽院蔵版には、上・中・下すべにて「无礙菴」「岩村真道」の二

つの印があり、両者とも蔵書印データベースに登録されている。「无礙菴」は、幕末から明治時代にかけて学者であり教育者だった今泉雄作の号である。東京美術学校教授、帝室博物館美術部長を歴任し、日本古美術の鑑識に長じた。岩村真道の人物像については掲載されていない。上巻は、内題の前に伝教大使御歌があるため、二種類の印の位置がずれている。「岩村真道」は最初に印を押すため御歌の前の表紙見開き頁にあるが、「无礙菴」は内題の下と最終頁に押印が一定しているため、御歌の後にある。中・下巻を確認すると、「无礙菴」の上に「岩村真道」の印が重なっている「挿図3」ため、今泉雄作のあとに岩村真道の所蔵となり、何らかの過程を経て、関西大学図書館所蔵となったのだろう。

一方、高山寺蔵版は下巻最終頁のみに「高山寺」の印がある「挿図4」。再版の事情に関しては、付属している外箱と刊行趣旨、進呈戦箋、そして高山寺蔵版下巻のみにある裏票の印に詳しい。外箱には「京都府下相楽郡瓶原村

内藤虎次郎様 梅尾高山寺 土宜寛了 代佐々木竹苞書楼 京寺町姉小路通」と記され、「書留小包」の判があ



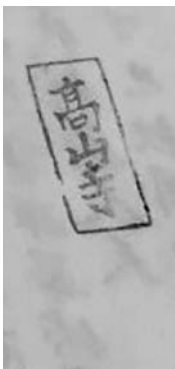
挿図2 『仏頂尊勝陀羅尼明驗録』
高山寺蔵版



挿図1 『仏頂尊勝陀羅尼明驗録』
比叡山常楽院蔵版



挿図3 比叡山常楽院蔵版の所蔵印



挿図4 高山寺蔵版の所蔵印

る〔挿図5〕。すなわち、土宜覺了に代わり、京都の佐々木竹苞書樓が内藤虎次郎へ本書を送ったのであろう。内藤虎次郎は、『日本人』、『大阪朝日新聞』などの編集や論説で活躍した東洋史学者の内藤湖南と同一人物と推測される。竹苞書樓は、佐々木惣四郎により寛延四年（一七五二）、京都に創業された書店で、現在は古書専門になっている。

刊行趣旨は、猪熊信夫によって昭和四年（一九二九）四月に書かれている。これによれば、願海の収蔵本の奥書に、願海自身がこの版木を高山寺石雲院に奉納していた事実を、猪熊が発見した。高山寺は、願海にとっても為恭にとっても関係の深い場所である。為恭は、筆者が分類する仏画の第一期に、高山寺の住職であった慧友のもとを訪れて仏画を多く模写し、古籍に親しんでいた。当時の高山寺は古画古籍の集約地点であった。安政三年（一八五六）からは、為恭の勧めで、一年あまり願海が高山寺石雲院に仮寓した。その様子を、幻想的な演出を加えて『石雲清事』にしている。願海が奉納した理由には、このような縁があるのだから。

猪熊がこれを見つけたとき、運命的にも、二年後の高山寺開山明恵上人七百年遠忌のための諸堂修理事業



挿図5 高山寺蔵版の箱

がはじまり、願海と為恭のことが世に知られ、為恭遺筆の展覧会が相次いで起ころうとしていたので、寺費の一端にするために高山寺と相談の上、古典出版の経験が多い竹苞書樓に依頼して、刊行に及んだという。ここで述べられている為恭の相次ぐ展覧会とは、昭和四年（一九二八）恩賜京都博物館「大和絵復興の名家冷泉為恭画蹟展観」、昭和十七年（一九四二）恩賜京都博物館「復古大和絵派一訥言・一蕙・為恭展覧会」などを指しているのだから。帝国化する社会背景と政治的意図によって、復古大和絵が恣意的に用いられてきたことは拙稿で論じた⁵⁾。猪熊はこの趨勢にあつて、実利的な理由と絡めて出版に持ち込んだようだ。これを切っ掛けに為恭へ興味を惹かれたのか、猪熊は、この後に為恭に関する著作を発表している⁶⁾。

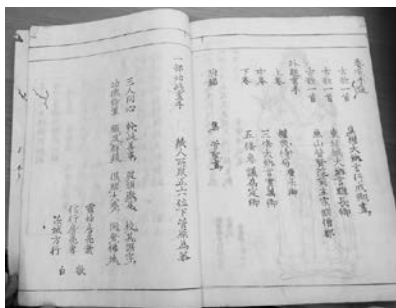
刊行趣旨には、金捨八圓送料不要で限定百部を竹苞書樓が販売していたともあるから、外箱の存在とも一致しよう。高山寺蔵版の裏表紙には、「昭和四年 内藤湖南 猪熊信男 加藤源兵衛 佐々木惣四郎 土宜覺了」と印がある。つまり、本書は再版に尽力した内藤湖南（虎次郎）に対する謹呈の意味がある。出版の際に高山寺に相談を持ち掛けているので、所蔵印を押す時期は読み辛い⁷⁾が、この事業関係者の内輪のやり取りが垣間見える。

再刷にあたっては、紙質、印刷、題箋、帙、紐等が悉く原本に忠実であるよう意識したと述べられているように、比叡山常楽院蔵版と高山寺蔵版は基本的に同じであるが、いくつかの相違点も

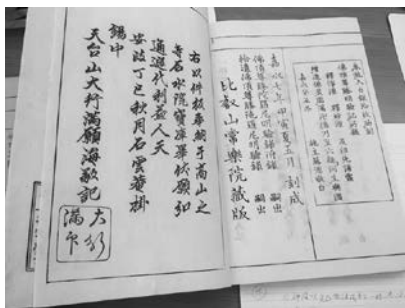
存在する。以下、両版を比較して相違点を交えつつ、説明する。

まず、書誌について述べる。上・中・下の三巻で一揃えになる。一丁の寸法は、いずれも縦約二五cm×横三四cmである。つまり、一頁の横は一七cmになる。半紙判の大きさを横に二つ折りにした大きさに該当するので、江戸期を通じて最も標準的な半紙本に当たるのだろう。表紙と裏表紙には、単色刷りで朝顔らしき模様が、漂うように装飾されている。厚手の紙表紙で、前後の表紙裏には本文と同じ用紙を一枚裏付けしている。四方共に折り込まず、切ったままのものをそのまま用いており、簡略的な切り付け表紙である。比叡山常楽院蔵版の表紙に題簽は無く、中巻のみ左端に外題が書かれている。色褪せ、所々に虫食いや剥落がある。右辺の二か所を房紐で結んだ結び綴じになっている。関西大学図書館の書誌詳細には「大和綴じ」と登録されている。中野三敏氏によれば、この綴じ方は、江戸期に入ると専ら写本に用いられることが多く、版本に用いられた例は極めて少ない。同氏が知る数少ない例の傾向として、ごく初期の謄本か、懺法、声明、和讃類などの実用的な仏書に限られるというから、興味を惹かれる。江戸期版本のほとんど九割までは、中国の「線装本」をそのまま用いた「袋綴じ」であるという。

次に、書籍としての構成に注目する。三巻ともに見返しも扉も無い。奥付は下巻のみ記載されており一丁半の分量をとる「挿図6」。引用した和歌の出典や、揮毫した人物など細かに記載され



挿図6 比叡山常楽院蔵版下巻奥付



挿図7 高山寺蔵版下巻奥付

ており、願海の勤勉な性格が窺える。高山寺蔵版には、最後に願海の漢詩が半面追加されている。「天台山大行満願海敬記」として、囲い枠の中に「右以件板奉納于高山之寺石水院宝库畢伏願如通遊代利益人天 安政丁巳秋月石雲庵掛錫中」と記され、その下におそらく願海の朱文方印を模したものが押されている「挿図7」。これは前述の刊行趣旨の中で、猪熊が見つけた願海の奥書そのままである。外題の書き手は、「上巻 権典侍局 慶子御」「中巻 三條大納言実萬卿」「下巻 五條参議為定卿」と挙げられているので、比叡山常楽院蔵版の奥書に従って再現したのだろう。高山寺蔵版は、二重枠で上下を湾曲させた外題が張り付けられている。字体が、上巻は草書、中・下巻は楷書と違いがあるのも、原刊を意識して

いるのだろうか。「一部終始画手」は勿論「藏人所衆正六位下菅原為恭」である。後述のように、挿絵の中には為恭の弟子や智満和尚も含まれているが、それはあくまで写しであるため、一部終始と なっているのだろうか。さらに、「三人同心 幹此善事 従徳餘薫 願及群類 俱醒大夢 同登仏地」とある。この三人の同心とはそのあとに続く、「靈妙房亮海 真言房亮孝 茨城方行」である。亮海は願海の弟子である。名前の響きから察するに亮孝も、そうであるかもしれない。興味深いのは、よくよく観察すれば、三人目の茨城方行が高山寺蔵版では削り取られて、不自然な空間が空いていることである。再刊の際に、願海の著作であることを目立たせるために、彼を削除したのだろうか。「嘉永七年甲寅夏五月」に刻成した「仏頂尊勝陀羅尼明驗録附録 嗣出」「拾遺仏頂尊勝陀羅尼明驗録 嗣出」という記述が続く。蔵版者は比叡山常楽院なので寺院版にあたる。

さらに、版面に注目する。無匡郭無野で、欄上欄脚の境界線を引く。上欄の内側二分ほどのところに横線を引いて註を加えている。この眉標は挿絵を説明する本文に対応している。柱には巻数と丁付けが彫り込まれている。頭注に加えて、小字双行の割注も併用する。のどには毎頁、異なる名前が刻まれているが寄進者名だろうか。高山寺蔵版の刊行趣旨によれば、下巻の渡唐天神だけは版木を欠いていたので、六角街の法衣商、藤源主人の特志によって新たに版木を修復し完成したそうである。この藤源主人の祖

父源右衛門は、願海のために製本の費用を施入したので、比叡山常楽院蔵版下巻奥付の枠囲いされた「奉施入白銀拾枚助刻 仏頂尊勝明驗記所願 釈浄源 釈妙源 及祖先諸壽 増進仏果圓 萬卅徳乃至 六趣同生樂國 施主藤原敬白」と同一人物ということになる。つまり、再刊の際に「藤源」の子孫を頼ったようだ。

そして、本文の構成要素は以下のとおりである。上巻は、天台根本伝教大師御歌の題字に始まる。嘉永七年（一八五四）五月に為恭が行成の文字を組み合わせて書体を再現している。上巻巻頭の古歌二首は「集権大納言行成卿書」と「東坊城大納言聡長卿」なので、これも奥書と一致する。高山寺蔵版は、このあとに「慈鎮和尚和歌」の版面がある。これはおそらく、奥書に「古歌一首 魚山善賢院前主宗淵僧都」とあるにもかかわらず、比叡山常楽院蔵版には存在しないため落丁と判断し、より正確に再現するために再版時に付け加えたのだろうか。続いて、東坊城大納言聡長卿が後述の①と同じ日藏上人和歌を揮毫しており、この丁だけ有野である。不自然にも有野線しかない半丁を空けて、序や凡例、目録もないままに、本文の首に内題「仏頂尊勝陀羅尼明驗録卷之上」があり、次行に編集の「叡山太行満常楽院沙門願海」と記される。巻末は尾題「尊勝咒明驗上」で締めくくる。内題と尾題で書名は一致してはいないが、これは中下巻においても定型となっている。中巻は本文のみである。下巻は本文のあとに、四丁に及ぶ王法仏法の節を筆録し、慈本による他跋「賜欄衫記」を自筆刻で載せ、

白文方印と朱文方印を添える。それに対する願海の説明と朱文方印がある。半丁に後述の㊸渡唐天神図と漢詩を載せる。奥付の「附録 集音聖書」はこれを指すのであろう。

最後に、三巻の著述内容の大略を示しておく。三巻ともに、既存の仏教説話集から西域、唐土、日本の陀羅尼に関する奇譚を願海が集めて編集した選集である。和漢混交体となっているのは、原典に倣っているのだろうか。句点、所々に振り仮名、漢文の箇所には字句の右側に付訓を伴う。陀羅尼に関する碑や仏塔なども紹介する。上巻は、尊勝陀羅尼の誕生とその功德、それが高僧によつて日本に齎され、鎮護国家という大願のために陀羅尼を布教し千日回峰を成し遂げた願海自身がその高僧に名を連ねるように、歴史的順序で逸話が並べられている。千日回峰とは、比叡山を代表する修行で、比叡山の峯々を一日三十キロ以上歩き巡ったり、断食して念誦修法に専念したり、京都中の神社仏閣を参拝するたぬめ一日八十キロ余りも歩くという苦行である。このような修行を千日行くと満行となり、それを達成すると大行満大阿闍梨と呼ばれ、特に尊敬された。中巻は、これといった特徴はなく、説話の抜粋が並んでいる。下巻で元寇に関する記述が全体の約四分の一を占めているのは、出版当時の幕末の社会背景が影響しているのだろうか。ほかの逸話がひとつの典故に拠るのに対して、『蜃縄抄』、『増鏡』、『善隣国宝記』、『神皇正統記』、『日本古記』、『元亨釈書』などの記述を並べている。文献調査により歴史的事実を見

極めようとする意識がみられる。そのあとは、やはり、説話集や經典から陀羅尼に関する箇所を抜粋して記載している。

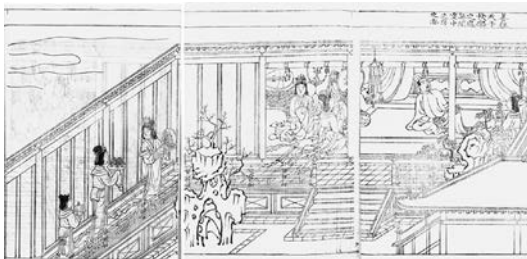
二 挿絵の考察

冷泉為恭の仏画研究の観点から、本稿は挿絵に注目する。上巻に八枚(①)~(⑧)、中巻に十一枚(⑨)~(⑱)、下巻に九枚(⑳)~(㉘)あるので、全部で二八枚である。本節では、逸話の内容と照らし合わせながら挿絵を紹介する。

① 善住天子快樂之処忽聞空中之聲之図

中之聲之図 [挿図8]

あるとき切利天の善法堂会に善住という天子がいた。多くの天女と共に、楽園で楽しく暮らし、天人の果報を享受していたが、ある夜、天より声があり、善住は七日のうちに命終し、その後は畜生道に七回輪廻し、地獄に落ちるといわれた。善住は畏れて、切利天の主である帝釈天に、これを伝えた。帝釈天は善住を憐れみ、これを救うのは釈迦しかいないと教えた。



挿図8 善住天子快樂之処忽聞空中之聲之図

祇園精舎に行き、釈迦に滅罪の法を尋ねたところ、仏頂尊勝という陀羅尼を説いた。これを唱えて信仰すれば、直ちに悪業を滅し、輪廻を離れ、清らかな場所に生まれ変わって長寿を得ると諭したのである。

本図は、善住天子の豪華な邸宅での暮らしぶりを一丁半に展開している。三頁目の廊下から美しい天女たちが食事を運び込む。善住のそばの美女らは談笑しているが、善住はふと空中の声に気づき、虚空を見上げながら訝しげな表情をしている。庭には中国風の奇石が太い筆致で描かれている。

願海が信望する『尊勝陀羅尼經』の誕生を記した記念碑的物語である。『真言鉞石集』より引用したと記載されているが、本書にはこの物語に関する記述は短く、この挿絵の情景が詳しく説明されてはいない。

② 文殊化現勸弘尊勝利益群生之相 [挿図9]

同じく『真言鉞石集』を典故として、善住天子の直後に書かれた文章を絵画化している。この『尊勝陀羅尼經』を、文殊菩薩の導きにより、北天竺から中国五台山へ招来した仏陀波利の物語である。

本図は、山頂に向かって礼拝をしている仏陀波利の前に、老人に扮した文殊菩薩が現れ、バラモン語で『仏頂尊勝陀羅尼經』を中国に広め、救済するよう伝える場面である。背景は一切なく、

三人だけが描かれるのは、非日常的な空間を想起させるためであろうか。物語には彼らの服装や背景を説明する記述はない。化現した文殊菩薩に関しても「老翁」としか記載がないが、木の葉や藁を身に纏い、髭を長く伸ばした仙人風に描かれている。その視線の先には、精悍な顔立ちで、

右手に数珠、左手に杖をもつ仏陀波利が堂々とした様子で描かれる。後ろに控えるのはお供であろう。旅装束の童子である。①と②は該当文章から、かなり離れたところに挿絵が入れられている。

③ 冥官得益之図 [挿図10]

栄海僧正『真言伝』に拠る。昔、中国の王少府という人が夢の中で梵僧から尊勝陀羅尼を授かり、毎日唱えていた。あるとき王少府は急死したが、七日後に不思議と蘇生し、冥土での経験を以下のように語った。

あの世では、たちまち二人の使者がやってきて、彼らと共に十数里の道を歩いた。一本の大木があり、そこで休憩することにな



挿図9 文殊化現勸弘尊勝利益群生之相

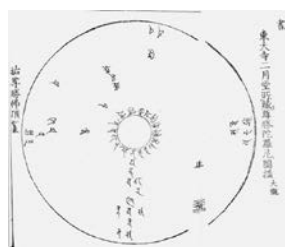
った。王少府は計らずも、そこで瞑目して尊勝陀羅尼を二一遍ばかり唱えた。目を開くと、使者が掻き消えていた。今度は四人の使者がやって来て、王少府が唱えた尊勝陀羅尼により先の二人は天上界に生まれ変わったので、自身にも唱えてほしいと言う。そこで、同じように唱えてやると、同様のことが起きた。このように冥土の住人を救うことを繰り返していたら、閻魔王がやって来て、現世に戻された。



挿図10 冥官得益之図

本図は、台座に座り目を閉じて陀羅尼を唱えている王少府を正面から描いている。画面左上のぼんやり描かれた雲の上の人物は、この功德により生まれ変わった人物らを象徴する。

④ 東大寺二月堂所蔵尊勝陀羅尼図撮大概【挿図11】



挿図11 東大寺二月堂所蔵尊勝陀羅尼図撮大概

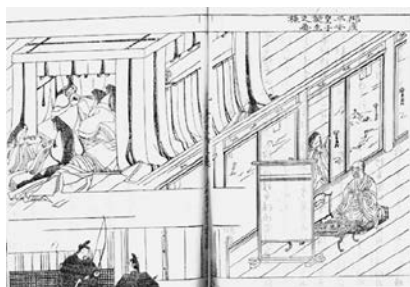
②で仏陀波利が中国へ伝来した『尊勝陀羅尼経』を日本に招来したのが弘法大師である。本図については、後述する⑦仏頂尊勝陀羅尼碑文に記述がある。空海は世の衆生を救うため、日本に渡来したこの陀羅尼を輪の形に書き写し、板

に刻み東大寺二月堂に安置した。二月堂が焼けたとき、この板は裏が焦げただけで無事だった。本図はその大概である。

⑤ 御産平安皇子誕生之図様【挿図12】

『真言伝』に拠る。真雅僧正は、空海の弟で、十大弟子の一人でもある。清和天皇の誕生以来の護持僧で、天皇とその外祖父藤原良房から厚い信任を得た。真雅は親王生誕から貞観一六年（八七四）まで二四年間、常に侍して聖体を護持した。

本図は、嘉祥三年（八五〇）に、右大臣藤原良房の娘明子が、のちに清和天皇となる惟仁親王を生む際に、真雅が祈祷を行った結果、無事に生誕した場面である。やまと絵に伝統的な吹抜屋台で描かれる。画面右の衝立の向こうに険しい表情で座るのが真雅である。襖を開けた侍女が皇子の生誕を告げに来たのだろう。画穩やかな表情で手招きする。画面左には赤子を抱く老女がいる。その周りで侍女らが産後の手当てをしている。壁を隔てて、前景には弓を持つ隨身と思しい二名が顔を見合わせている。全体の構図は安政二年（一八五五）京都御所襖絵《清涼殿更衣図》



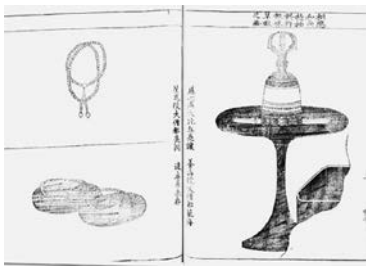
挿図12 御産平安皇子誕生之図様

によく似ている。

⑥ 相応和尚持物鈴杵数珠草鞋之図 [挿図13]

平安時代前期の天台宗の僧相応の伝記である『天台南山無動寺建立和尚伝』に拠る。『相応和尚伝』とも称する。本書は相応の伝記史料のなかで最も詳細であるうえ、相応の没後間もない時期に成立したとみられることから、相応の伝記の根本史料とされている。相応は、葛川明王院や無動寺を創建したことから建立大師と称されている。ここで相応和尚が登場するのは、天台修験の千日回峰行を創始したためであろう。

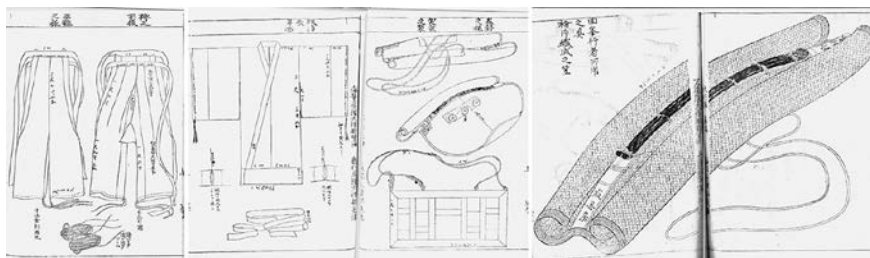
本図は、染殿皇后に憑いた天狗を調伏する話に由来する。この話の中で、和尚は貧しい身なりをしていたために、その靈験を怪しまれる場面がある。その時に身に付けていたのが、数珠と草鞋であった。為恭は、安政二年（一八五五）に同画題の《相応和尚染殿皇后御加持図》（比叡山延暦寺蔵）を描いている。鈴杵の図の右下が不自然に欠けているのは、参考にした本に剥落か破れがあったためと推測できる。鈴杵に関する記述はないが、祈禱を象徴しているのかもしれない。



挿図13 相応和尚持物鈴杵数珠草鞋之図

⑦ 四峯行者取用之具 檜庁織成之笠 卷舒之様 袈裟之製 坂浄衣並帯 袴之前後 草鞋之様 [挿図14]

『北嶺行門記』は、千日回峰の由来や目的、方法を伝える指南書である。本図は、必要な道具を二丁半にわたって絵人で解説している。寸法や色味まで細かく書き込まれ、現実味がある。この説明を終えた後に、願海自身が鎮護国家の大願成就のため、不惜身命でこれに挑み、見事大行満となったことを付け加えている。そして、十一月には、回峯行満行の先例に倣って、孝明天皇および皇子ための加持を行ったことも書いてある。満行者は京都御所に土足参内し、加持祈禱を行う。京都御所内は土足厳禁であるが、満行者のみ許される。回峰行を創始した相応和尚が草鞋履きで参内したところ文徳天皇の女御の病気が快癒



挿図14 四峯行者取用之具 檜庁織成之笠 卷舒之様 袈裟之製 坂浄衣並帯 袴之前後 草鞋之様

したからであるとも、清和天皇の後の病氣平癒祈祷で草履履きのまま参内したからだともいわれている。これらの業績は、願海にとって己の信心を証明する重要な証左であるため、『願海阿闍梨像』《忘形見絵巻》などに記念碑的出来事として繰り返し登場する。

⑧ 比叡山相輪様之図 [挿図15]

『四箇大寺古今伝記拾要新書 延暦寺帙』から比叡山相輪様之図を写している。延暦寺相輪様は、現在も存在しているが、これは明治二八年（一八九五）に再建された。様正面には平安時代以来刻まれてきたと考えられる弘仁十一年（八二〇）最澄撰の銘文が刻まれており、本書の記述と一致している。塔内には諸経が奉納されており、本書にそれを列挙している。その中に「仏頂尊勝陀羅尼經 一卷」も含まれている。「恭法拝写」とあるので、名前から類推すれば、のちに登場する恭義と同じく、為恭の弟子が描いたものかもしれない。



挿図15 比叡山相輪様之図

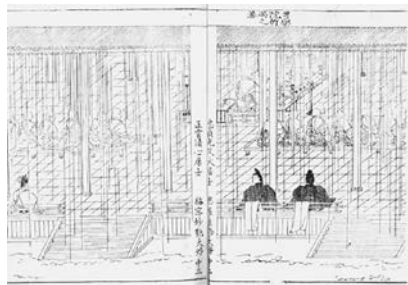
⑨ 豊楽院祈雨之図 [挿図16]

『尊意僧正別伝』に拠る。延長三年（九二五）夏、ひどい旱魃であった。大納言藤原朝臣清貴の勅旨により、尊意大法師は、延暦寺で甘雨の法を命じられた。尊意は六名の僧を引率して仏頂尊勝法を奉修した。六日目の朝、尊意は夢に四大龍王示現の想を感じ、七日目の正午には東南の隅からひとかたまりの雲が北を指して、いよいよ大きくなるや突然雨が降った。尊勝の秘法の興隆はここに始まった。

本図は、御所豊楽院を正面から描く。画面中央でひとり護摩壇の前に座るのが尊意であろう。その後ろに僧が横並びに坐っている。その後ろで修法を見守る公家の一人が雨に気づいたのか、振り返っている。

⑩ 地獄権破之相 [挿図17]

『日藏上人感夢記』とは『日藏夢記』を指すか。『日藏夢記』とは、僧道賢が吉野の金峯山で修行中、仮死状態に陥り、蔵王菩薩の案内で異界巡りをし、宇多法王、醍醐天皇、菅原道真の化身で



挿図16 豊楽院祈雨之図

ある太政威徳天などに会うという、天神伝説の最古の文献の一つである。この説話は天慶四年（九四二）『扶桑略記』第二五「道賢上人冥途記」によって知られているが、『日蔵夢記』はその原型である。この後、日蔵は金剛蔵王の神通力によって閻魔王界に行き、王の使いの導きで地獄を巡るが、そのひとつの鉄窟苦所において延喜王、すなわち醍醐天皇と三人の家臣が赤い灰の上に蹲っているのを見た。天皇は日蔵に自分の苦を救うための善根を願った。さらに、日蔵は金剛蔵王から、延喜十四年（九一四）の京都の大火、同十七年の東大寺・同二十一年の崇福寺・延長三年（九二五）法隆寺火災、承平五年（九七五）延暦寺火災、平将門の乱、奥州の阿部貞任・宗任の反乱、源平の争い、長承・養和の飢饉、文治元年（一一八五）大地震、同五年の大風、建久の洪水などの災難は、全て自分の眷属の働きによるものと説明されたあとに蘇生する。道賢は金剛蔵王菩薩の教えによって日蔵と名を変える。

見開きの左頁に燃え盛る炎の中で煮え滾る鍋が大きく描かれる。中には救済を求める人物がいる。画面右に立つ道賢は目を閉じて印を組み、念じている。そうすると、窯が割れて、湯が零れた重みで斜めになる。その



挿図17 地獄摧破之相

傍に蓮の上に載った童子らが現れる。画面右の炎に包まれた扉は、地獄の門なのだろうか。この文脈の続きとして、⑪の和歌が来る。

⑪ 日蔵上人和歌の芦手絵【挿図18】

『新古今和歌集 釈教』より、「みたけの笙のいはやにこもりてよめる 日蔵上人 寂寞の古けの岩戸の志づけきに涙乃雨ののふらぬ日ぞなき」を引用する。苔のはえたこの岩窟が、『法華経』法師品「若説法之人、独在空閑処、寂寞無人声、読誦此經典、我爾時為現、清浄光明身」という経文そのままに、ひっそりと静かなので、涙が雨のように降らない日はない。御岳の笙の岩屋とは、大和国大峰の行場として有名である。深い宗教的感激のあまりに流す涙を雨に見立てている。

「古人芦手 原本不知何処所蔵 菅原為恭蔵其摸本」と記してから、本図があるので、原本は所蔵不明だが、為恭が蔵する摸本を写したとわかる。和歌を芦手で画面左右に配し、岩窟に見立てた文字の間に日蔵上人が合掌して坐す。略画風の筆致で描かれた上人の手元には祭壇らしきものがあり、歌意を画像化している。

日蔵上人は、天慶四年（九四二）秋、ここで苦行中に頓



挿図18 日蔵上人和歌の芦手絵

死し、⑩で語ったように六道をめくり蘇生する。その筆法は《沙石集強盜法師図》《撰取引接図》などの略画風の仏教絵画に通じる。

⑫ 陽勝仙人来聴誦咒聲之図 [挿図19]

『真言伝』に拠る。浄観僧正という人がいた。常の勤行で、夜になると尊勝陀羅尼を終夜誦えていた。ある日、陽勝仙人が、この僧がいる房の上を飛んでいくと、これが聞こえてきた。その貴い声に強く惹かれ、房の前の榎の木にとまって聞いていた。そのうち、いよいよ有り難く感じられたので、木から下りて房の高蘭に座った。それに気づいた浄観は、陽勝を部屋の中に呼び入れ、終日色々と話あった。明け方になり、陽勝は帰ろうとしたが、人間の氣に触れて身体が重くなってしまう、空に飛び立つことができなくなってしまう。陽勝に言われるがまま、浄観が香炉を近づけると、彼はその煙に乗って空に昇っていった。浄観は、その後もずっと香炉に火を焚き続け、煙を絶やすことはなかった。

本図では、静かに高蘭に腰掛けて耳を傾ける陽勝に浄観がまだ気づいていない。画面左上の山間から満月が輝い



挿図19 陽勝仙人来聴誦咒聲之図

て、この情景を明るく照らし出している。

⑬ 諸神来臨聴経之図様 [挿図20]

『本朝法華伝』に拠る。道命は、『法華経』を説経する名人であった。法輪寺に籠って、礼堂で『法華経』を誦していると、金峰山の蔵王、熊野権現、住吉大明神、松尾の大明神などといった神々が、素晴らしいその説経を聴聞しようと来臨した場面を絵画化している。画面中央に礼堂に籠り説経する道命の様子が黒い影で表される。この逸話は、これを目撃したひとりの老僧の目撃談に表れている。これによれば、神々は堂の庭に、身分のある気高く立派な人々が隙間がないほど集まっていて、皆合掌して堂に向かって座っていたとなっているが、本図では雲の上に立つ六柱になっている。物語の続きでは、このあとに、夫の霊に取りつかれた女が道命の説経を聞いて難を逃れ、長命を保った話が全文引用されているが、挿絵には全く関連していない。本図は、この逸話の中で『法華経』の功德が最も現れる記念碑的な瞬間を切り取っている。

本図に関して注目されるのは、文久三年（一八六三）三月に制作された《仏頂尊勝陀羅尼神明仏陀降臨曼荼羅図》



挿図20 諸神来臨聴経之図様

との関係である。その図様は大変異様で、大宝院を中心に三十三体の神明と仏陀の降臨を描いた神仏合体のものである。『仏頂尊勝陀羅尼經』の「三十三天於善法堂会」という言葉に基づいて、願海の発案で為恭が絵画化したものと考えられ、他に例がない。画面の中央に陀羅尼を円状に記した宝塔を配し、その宝塔にむかって、三十三体の神仏が降臨するさまを描く。右には日本の神々、左には仏菩薩が降臨する。図像の正確な尊名を比定することは容易ではないが、熊野権現や住吉明神と思われる人物が描かれている点が興味深い。

⑭ 悪鬼驚怖之図【挿図21】

『今昔物語集』に拠る。大納言左大将の藤原常行は、二人の供と共に女のもとへ通う途中、百鬼夜行に遭遇するが、尊勝陀羅尼を襟に縫い付けていたお陰で難を逃れる。本図は、神泉苑に差し掛かったときに見えた松明を持つ一行を怪しんだ常行らが、神泉苑の北門に隠れたが、鬼たちに発見された場面である。画面左に身を屈め隠れる常行らが描かれるが、門の手前にいる。

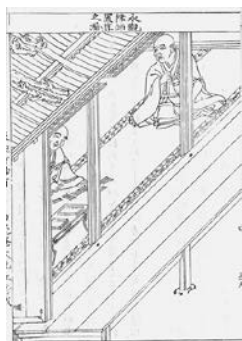


挿図21 悪鬼驚怖之図

文章には登場しない童子も身を寄せる。常行の顔貌は、いかにも為恭風である。画面右上の鬼らは、常行らを指さし、発見した瞬間のようである。鬼らに関する描写は細かく記載されていないが、為恭の鬼は地獄のそれに似ている。常行から伸びる線は尊勝陀羅尼の功德を表現しているのだろう。それを浴びて一匹の鬼が逃げ去っていく。異時同図法が使用されている。無事に帰宅した常行は熱を出すも救われ、尊勝陀羅尼の靈験に感心した。これを聞いた人は皆、尊勝陀羅尼を書いて、御守りとして身に着けたと語り伝える。陀羅尼の功德を伝える元も有名な逸話のひとつである。

⑮ 永観律師置算之図【挿図22】

鴨長明『発心集』に取材する。念仏への信仰が厚く、地位や名誉を求めない永観律師は、東山禅林寺に籠居しつつ、人に物を貸して日を送っていた。借りるときも返すときも、相手の心に任せていたので、借りた人は仏のものを疎かにできないと感じて、些かも約束を破ることはしなかった。あまりに貧しい者が返さないときには、仏前に呼び寄せて、借りたものの値に応じて、念仏を唱えさせて購わせた。東大寺の別当という地位を得ても、その心がけは変



挿図22 永観律師置算之図

ならず、東大寺の修理が終わればすぐに辞任した。深く戒律を破ることを恐れたために、長年寺のことを取り仕切っていたが、寺物をほんの少しばかりも、自らの用立てにしたことは一度もなかった。

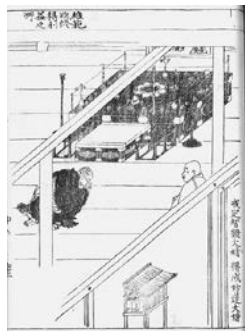
本図はこの続きを絵画化している。ある時、この堂にやってきた客人が、算木という計算用具を置き広げた。その理由を問えば、長年申し集めている念仏の数を数えていた。屋内を俯瞰し、永観と客人のやり取りを描いている。両手で算木を並べる客人を、訝し気な表情で永観が見ている。

⑩ 維範臨終得利益之所【挿図23】

三善為康『拾遺往生伝』である。本書は、大江匡房『続本朝往生伝』の拾遺となっており、往生者九五名の略伝を記す。

これは、俗に南院阿闍梨と呼ばれた維範の臨終に際する奇瑞の物語である。西方極楽浄土を望んで長く高野山の雲海に過ごしていた維範は、享保三年（一〇九六）病になった。尊円上人に尊勝護摩法を修法させ、自身の臨終正念にそなえた。その日、維範阿闍梨は護摩壇に向かって礼拝した。その際に、自身の命が今夕で尽きるため、曼荼羅を見るのがこれが最期であると宣言した。すぐに本房に帰ると、西を向いて端座し、手に阿弥陀仏の妙観察知の印を結び、口に阿弥陀仏の法号を唱え、用意していた五色の糸を阿弥陀仏の御手につないで、自分の印と接するようにした。そ

挿図23 維範臨終得利益之所



瑞を見聞したという。

本図は、自身の往生を覚悟し、最期に護摩壇へと祈りをささげる維範が描かれている。護摩壇が大きく画面を占める。傍で穏やかに見守るのは慈円であろう。

⑪ 公胤僧正延命之明驗【挿図24】

正元師蛮『本朝高僧伝』に拠る。元禄一五年（一七〇二）に成立し、一六六四名の日本の僧侶の伝記を所収する。三論、法相、俱舎、成実、華嚴、律、顯密、禪、浄土に関する高僧の伝記のほかに、明神、仙人、高德な人の伝記も載せているが、親鸞と日蓮については触れていない。

三井寺で仏教を学び始めた

挿図24 公胤僧正延命之明驗



幼い公胤は、大変優秀である代わりに、長くは生きられないと思われた。師匠はこれを嘆いて、尊勝陀羅尼を毎日二一遍唱えさせたところ、延命の利益があつて、のちに園城寺長吏に補され、さらに僧正となつた。画面中央に坐す幼少の公胤に師が尊勝陀羅尼を命じている。この公胤の姿と、為恭が多数描き遺している《稚児普賢菩薩像》との類型表現と相違については以前拙稿で指摘した。⁽⁸⁾

⑱ 陀羅尼力解脱披毛戴角之図 [挿図25]

『沙石集』に拠る。近江の国に住み、三河のある山寺に通つていた僧がいた。この僧は修行をせずに信者からの布施を受けていた。そのためであろうか、その僧が師僧の下に行つて坊に入ろうとしたが、下女が棹で打とうとしてくる。「これはいったいどうしたのか」と言おうとしても声が出ない。もう一回師僧のもとに行こうと思ひ立つたが、今度はあの下女が「この牛が。用事があるからまた来るのだな」と言つて馬屋に入れて繋いでしまった。僧が自分の姿を見てみると牛になつていた。僧は信施を食つた罪を消すために尊勝陀羅尼経を唱えようとしたが覚えていない。せめて「尊勝陀羅



挿図25 陀羅尼力解脱披毛戴角之図

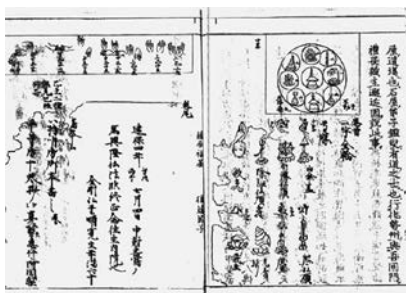
尼」という名前だけでも唱えようと思つても、きちんと言えない。三日三晩言い続け、やっと唱えられた途端に人間に戻ることが出来た。

本図は、牛に代えられた僧が、陀羅尼を唱えようとする場面である。画面右の粗末な馬小屋の中に紐で繋がれている。手前に背の高い木を配してモチーフを重ね、奥行きを表現するのは、為恭の常套である。奥には師僧がいるだろう房が見える。口から煙のようなものが上るのは、ただ「そ、そ」としか声が出ないことを示しているのだろうか。首元は袈裟の形が残っている。顔は人間、身体は牛になつている。情けなく遣る瀬無い感情のはずだが、表情はどこか剽軽である。

⑲ 『臥雲日件録』の

写しか [挿図26]

出典を瑞溪周鳳『臥雲夢語集』としているが、『臥雲日件録』の誤りか。著者は、室町時代中期の臨濟宗夢窓派の僧である。八代將軍義政に重用され、文筆の才により室町幕府の外交文書の作成にあつた。『臥雲日件録』は彼の



挿図26 『臥雲夢語集』文明二年(1470) 庚寅の写しか

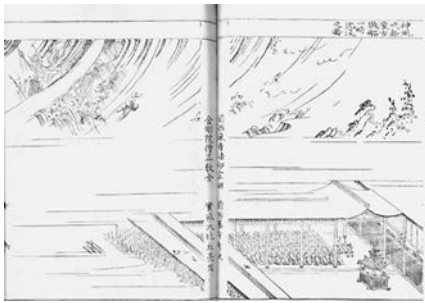
日記である。

本図は、『臥雲日件録』から引用した文章のあとに突如現れる。「駐畧」や「巻尾」の文字が見えるので、所々を抜粋したものか。虫食いあるいは破れを再現していることから、この書籍の図と奥付を剥落写したものとと思われる。阿弥陀の印が記されている点に、『山越阿弥陀図』（大倉集古館蔵）の逆手の転法輪印が想起されるが、これとは一致しない。これが中巻の末尾である。

⑳ 神風吹起蒙古賊船一時沈没之図（高山寺蔵版のみ）〔挿図27〕

周知のように、元寇とは、鎌倉時代中期に、当時中国大陸を支配していたモンゴル帝国およびその属国である高麗王国によって文永十一年（一二七四）と弘安四年（一二八二）の二度にわたりに行われた対日本侵攻の呼称である。蒙古襲来とも云う。一度目を文永の役、二度目を弘安の役と称する。

本図は、霞によって二頁を上下に分けている。夷狄の退散を願う祈禱を下に、それによって転覆する船の上に描く。祈禱には多くの僧が参画している。それによって神風が起



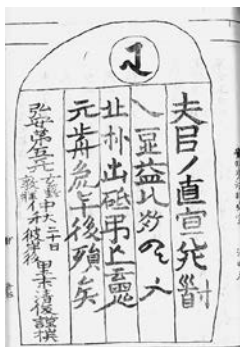
挿図27 神風吹起蒙古賊船一時沈没之図

こされ、木は撓み、波は荒れ狂う。船は大破し、鎧を着た蒙古人が海へ投げ出される。荒々しい主題に反して、宮中の屋根に我関せずと小鳥が止まっているのは、長閑なようで現実的でもある。この挿絵は高山寺版にしか存在しないが、丁目が一致しているので、再版時に付け加えられたのではなく、比叡山常楽院蔵版が落丁しているようだ。

㉑ 奥州燕澤碑文之积〔挿図28〕

元寇の話題が続く。燕沢碑は、宮城県仙台市宮城野区燕沢の善応寺境内に立ち、現存している。仙台市内に散見される蒙古碑と呼ばれる古碑のひとつで、元からの帰化僧である無学祖元が鎌倉時代後期の文永・弘安両度の元寇における元軍戦死者の追善のために建てたものと推測されている。

表面の碑額の円内に大吉祥大明菩薩の種字が刻され、その下の枠内の二八文字の碑文がある。末行には「弘安第五天玄黙敦 胖仲秋二十日彼岸終」の年紀がある。「コノ碑ノ文、古来読ガタシトセリ」とあるように、解釈には諸説あり、願海もそれに取り組んだようだ。



挿図28 奥州燕澤碑文之积

②② 獨足之鬼 [挿図29]

『仏神感応録』に拠る。ある僧が壮年の頃に、各地の師のもとを訪れて修行する遍参をしようと東国常陸へ赴いた。同寮の僧に、よく坐禅をして志が深い人がいた。雲樹深山で、昼でも魔所であるというのに、夜な夜な山中の故宮に拜殿して坐禅をしている。影響されて、その僧と共に修行に行くことにした。勤勉な僧は堂のほとりにある岩の上で坐禅をはじめたので、自身は堂の中にある賽銭箱に凭れて坐禅をした。本図は、夜が深くなると、山中から背の高い一本足の鬼が現れ、賽銭箱ごと坐禅する僧を絞めつけている場面が描かれている。本図だけは欄眉を廃して、欄外までいっぱいには迫力ある情景を描く。前景と堂の後ろに木々を配して深山を表現している。画面左中央寄りに、鬼の太く凹凸ある両腕で締め付けられる様子を描く。「不図入キテ。後ヨリ毛ノ生タル。ツメタキ手ニテ錢箱グルミニ抱キ固ヌ。其クルシサ怖サ言カタナシ。」という文章を忠実に再現する。鬼を描く筆線は太く抑揚があり、禍々しさを伝える。眼を大きく見開き、髪を逆立てる。堂



挿図29 獨足之鬼

の中で行われたことだが、屋根よりもこの出来事を重視する。堂の向こうの岩の上で坐禅する信心深い僧の姿が静謐で、対称的である。前景の僧より明らかに大きく描かれるのは、存在の聖性を意味していよう。画面左上の雲は、そのあとに出てくる黒雲を暗示しているのであろう。その後、石の上で修行していた僧が、連れが居ないことに気づき探すと、山中で気を失っていた。寺に戻ったが、その後発狂した。その際には黒雲がやってくるので、尊勝陀羅尼を唱えたところ、黒雲は来なくなり、僧は無事に本国へ帰ることが出来たということである。

②③ 李平幡印陀羅尼焚之回施冥道之図 [挿図30]

『異聞総録』に拠る。李平は、尊勝陀羅尼を信仰しており、小さな幡を作って、それに書き記していた。ある夜の夢に、冠を被った人と、髻を結った人が現れて、その幡をほしがった。李平は旗を焚いて彼らに差し上げた。

本図は逸話を忠実に絵画化している。木が生えた小高い丘の上で李平は屈みこんで合掌しながら、小幡を燃やしている。画面左上の雲の上にいる冥土の二人は文章の格好そのままである。



挿図30 李平幡印陀羅尼焚之回施冥道之図

㉔ 尊勝塔様 [挿図31]

㉕ 種子曼荼羅 [挿図32]

㉖ 仏頂尊勝陀羅尼 [挿図33]

この三図は、為恭以外の人物が描いている。源恭義は、父の永泰と為恭の弟子である。文面に拠れば、㉔尊勝塔の中には尊勝陀羅尼を蔵していたようである。「訖天保第 月 日。於仁和寺観音院供養訖」とあるので、時期はわからない。仁和寺の禅河院は、第一五世法守法親王の御室である。出典が挙げられていないので、この際に写生したものかもしれないが、均一な線で描かれているため、立体感がなく、まるで図形のようなものである。

㉕種子曼荼羅と㉖仏頂尊勝陀羅尼は、高井田寺僧智満が担当している。㉕は「紺紙金



挿図32 種子曼荼羅



挿図31 尊勝塔様



挿図33 仏頂尊勝陀羅尼

銀泥」であつたらしい。かなり細かい図様だが、画面全体のバランスを損なっていないので、画力の高さを伺わせる。㉖は「右印施尊勝陀羅尼已及七萬人今摸刻其様于茲」と説明し、図と銘文を引用している。銘文によれば嘉永三年（一八五〇）春に願海が印施したものであるから、千日回峰中に七万人に手渡していたとする摺写した尊勝陀羅尼のことであろう。㉔で触れた弘法大師の尊勝陀羅尼は、東大寺が外に見せることを惜しむので有り難い心が世に伝わらない。そこで、河内国の僧智満が模写した一本を園城寺法明院の敬彦が得て、これを印刷し諸人に施した。願海はなお広く普及させようと発起し、誰もが見られるように㉔北野天満宮に碑を建てることにしたという次第である。

㉗ 奉納北野聖廟建立仏頂尊勝陀羅尼碑碣図 [挿図34]

この図像は㉖の尊勝陀羅尼をそのまま受け継いでいる。この碑は元々、北野天満宮の宗像社のそばに建てられていたが、慶応四年（一八六八）の神仏分離令により東寺に移された。土台は鼻貞という中国の伝説上の生き物である。鼻貞とは、竜が産んだ九匹の子「竜生九子」のうちの一匹とされている。その甲羅の上に建つ石碑には、陀羅尼の布教に尽力した僧を挙げ、それに願海自身を連ねている。この碑が建てられたのは、碑文によれば、『仏頂尊勝陀羅尼明驗録』を出版してすぐの嘉永六年（一八五三）十月である。要するに、本書を執筆している段階で、陀羅尼布教のため

の碑建立の計画は完成していたことになる。その経緯に関しては、時代が下って安政二年（一八五五）に描かれた《尊勝陀羅尼碑建立写生図巻》に詳しい。その書き込みから、建立当時から二年を経ても冷めやらぬ信者としての為恭の感動が読み取れる。為恭が絵を、願海の友人で比叡山の学僧羅溪慈本が題と伝記を担当し、願海の生涯を描いた《忘形見絵巻》にもこの業績は勿論挙げられている。

⑳ 渡唐天神図 [挿図35]

本図は、本文が終わった後、奥付の前に突如として現れる。菅原道真が神格化した天神図は、いくらかのバリエーションがあるが、この図像は渡唐天神図と呼ばれる。これは、なんとも奇想天外な伝説で、東福寺を開いた円爾の助言によって天神が中国に渡り、円爾が師事した怪山万寿寺の無準師範に参禅する。そして嗣法の証として袈裟を授かるという逸話である。一四世紀半ば頃、九州にいた聖一派の禅僧たちが無準の伝記に登場する中国の神を天神に習合解釈したのがその始まりである。

挿図34

奉納北野聖廟建立仏頂尊勝陀羅尼碑碣図
 仏頂尊勝陀羅尼碑碣図



図像の特徴としては、渡唐を暗示する中国の仙冠や頭巾、道服などを身に付けて立ち、腰の上あたりで組んだ腕の間から持物の梅枝をのぞかせる。肩からかけた鞆には、授かった袈裟が入っている。また、⑲出典の『臥雲日件録』の筆者である瑞溪周鳳に対して、愚極が渡唐伝説を語っている。その伝説は、薩摩福昌寺の岩間から発見された天神像の賛文中に記されていたと伝えられる。これに拠れば、円爾の前に再び現れた天神が肩にかけた布囊を指さし、「吾^⑲受衣、在是中矣」と告げるくだりがある。この物語は⑲の箇所^⑲に文章化されている。

為恭はいつくか天神図を描いている。為恭の出自である京狩野第二代山雪（一五九〇―一六五二）や三代永納（二六三一―一六九七）が天神図を遺しており、為恭作品の中に狩野派の影響を認められるのではないかと以前論じたが、本図を見ると願海も天神信仰と何らかの関連があるように思われる。あるいは、永納は北野天満宮と深い関係にあったことが指摘されているので、為恭と願



挿図35 渡唐天神

海との出会いが、京狩野と天神信仰の關係に拠った可能性も検討の余地があるかもしれない。

おわりに

『仏頂尊勝陀羅尼明驗録』の為恭の挿絵を考察すれば、為恭が遺した多くの仏画との強い結びつきが感じられる。むしろ、本書が発刊された嘉永六年（一八五三）から文久三年（一八六三）頃まで、すなわち筆者が第二期と分類した時期に制作された願海ための多数の仏画は、本書の派生として描かれていると考えるのが妥当だろう。願海の思想へと深く接触し、それを視覚化した為恭のこの経験は、その後の為恭の制作に大きな影響を及ぼしている。願海の千日回峯完遂に纏わる一連の作品群は、本書を皮切りとして始まったというよりも、本書を中心として展開されたと考ええるべきである。また、本書に登場する高山寺慧友、宗淵、羅漢慈本、智満、三条実萬らは、その後為恭の生涯で重要な役割を果たす人物ばかりである。本書の制作が、為恭との出会いであった人物が多くいるのかもしれない。本書から、仏画だけではなく為恭の活動全体を見直せば、新たな知見を得ることも可能であろう。

注

(1) 願海と為恭の間に深い友情を読み取ろうとする傾向は、逸木盛照「冷泉為恭の生涯」にはじまるが、真実そのような関係であったと読み取り辛いことは、拙稿「冷泉為恭の仏画をめぐって」(『文化交渉: Journal

of the Graduate School of East Asian Cultures: 東アジア文化研究科院生論集』三(二〇一四年)で述べた。補筆修正を加え、博士学位論文「復古大和絵の解体と諸相」に再録した。

(2) 注1同文献。

(3) 大森義成「実修真言宗の密教と修行」(学研パブリッシング、二〇一〇年)。

(4) 蔵書印データベース <http://basel.nijiac.jp/~collectors_seal/>。

(5) 拙稿「復古大和絵研究史と新興大和絵―歴史画とイデオロギーの変遷をめぐって―」(『東アジア文化交渉研究』Journal of East Asian cultural interaction studies』六(二〇一三年)。補筆修正を加え、博士学位論文「復古大和絵の解体と諸相」に再録した。

(6) 猪熊信男「岡田為恭の画蹟と其勤王思想」(新三河新聞社、一九三二年)。同「岡田為恭の『記録』研究」(『美術工藝』二六一、一九六〇年)。

(7) 中野三敏「書誌学談義 江戸の板本」(岩波書店、二〇一五年)。

(8) 拙稿「冷泉為恭筆『稚児普賢菩薩像』試論」(井上克人編著『近世近代日中文化交渉の諸相』関西大学東西学術研究所研究叢書 第四号) 関西大学東西学術研究所/ユニウス発売、二〇一七年)。

(9) 村田正志「渡唐天神思想の成立」(村山修一編『天神信仰』、雄山閣出版、一九八三年)。

(10) 瑞溪「臥雲日件録抜尤」文安三年四月十五日条(『大日本古記録』)。

(11) 拙稿「京狩野のやまと絵(まづ)」(『文化交渉: Journal of the Graduate School of East Asian Cultures: 東アジア文化研究科院生論集』二(二〇一三年)。補筆修正を加え、博士学位論文「復古大和絵の解体と諸相」に再録した。

【付記】

本資料の所蔵館である関西大学図書館のご協力に厚く御礼申し上げます。

Gankai and Reizei-Tamechika “*Buccho-Sonshodarani-Meigenroku*”

HINAMI Ayano

This paper introduces the “*Buccho-Sonshodarani-Meigenroku*,” which was written by Gankai (1823–1873) and illustrated by Reizei-Tamechika (1823–1864). This book aimed at a propagation of *vikiraṇoṣṇīṣa* by telling the Darani stories of the past and present facts. Tamechika tried to restore the *Yamato-e* (traditional Japanese-style painting) in the late Edo period. This was published in 1854; that is, it is a work of the period when Tamechika met Gankai, and it should be considered at the forefront of a project memorializing Gankai’s completion of “The 1000 Day Circumambulation” which is Penance of Tendai sect.

キーワード：冷泉為恭 (REIZEI-Tamechika)、願海 (GANKAI)、尊勝陀羅尼 (vikiraṇoṣṇīṣa)、仏頂尊勝陀羅尼明驗録 (Buccho-Sonshodarani-Meigenroku)、復古大和絵 (Hukkoyamatoe)

